

尾州木東綺譚／「エキノコ玉ノ井」序開

(“断章ノコギリヤネのある風景 その10”)



▲ ノコギリ・スケルトン・トライアル

「文化の日」の11月3日。五年前、笹屋の「のこぎりニ」で第1回のご座が開催された。この地域の文化を語る上で記憶に留めたい日である。

そして、2021年の同じ日、名鉄尾西線玉ノ井駅に隣接するノコギリヤネ（エキノコ玉ノ井）で、「ノコギリ・スケルトン・トライアル」と題して、のご座が開かれた。個人的には、この玉ノ井という土地も忘れがたい地である。二年前の十月、前年の台風によって大きく傷ついた「エキノコ玉ノ井」に促されるように玉ノ井の町を歩いた。そして、『断章・ノコギリヤネのある風景』の手記を始めるきっかけとなった。

小説家・永井荷風の『濃東綺譚』は、墨田川（隅田川）の東岸、旧東京市向島の私娼窟・玉ノ井を舞台とする物語（譚）である。荷風は、玉ノ井という「ラビリンス（迷宮）」に魅了された。綺譚の「綺」は、古代日本の幅の狭いひも状の織物を表し、横糸に色系を用いて縞を織ると云う。

こちらの尾州の玉ノ井もラビリンスである。多くのノコギリヤネと細かい街路が交錯する迷宮である。木曾川の東岸を舞台に、ノコギリヤネの持ち主を縦糸として、そこに交わる多様な人たちが織りなす「木東綺譚（ぼくとうきたん)」。開かれた「エキノコ玉ノ井」の物語が始まる。

ノコギリアン（神奈川県藤沢市在住ノのこぎりニにノコギリアン・コウバを開設）

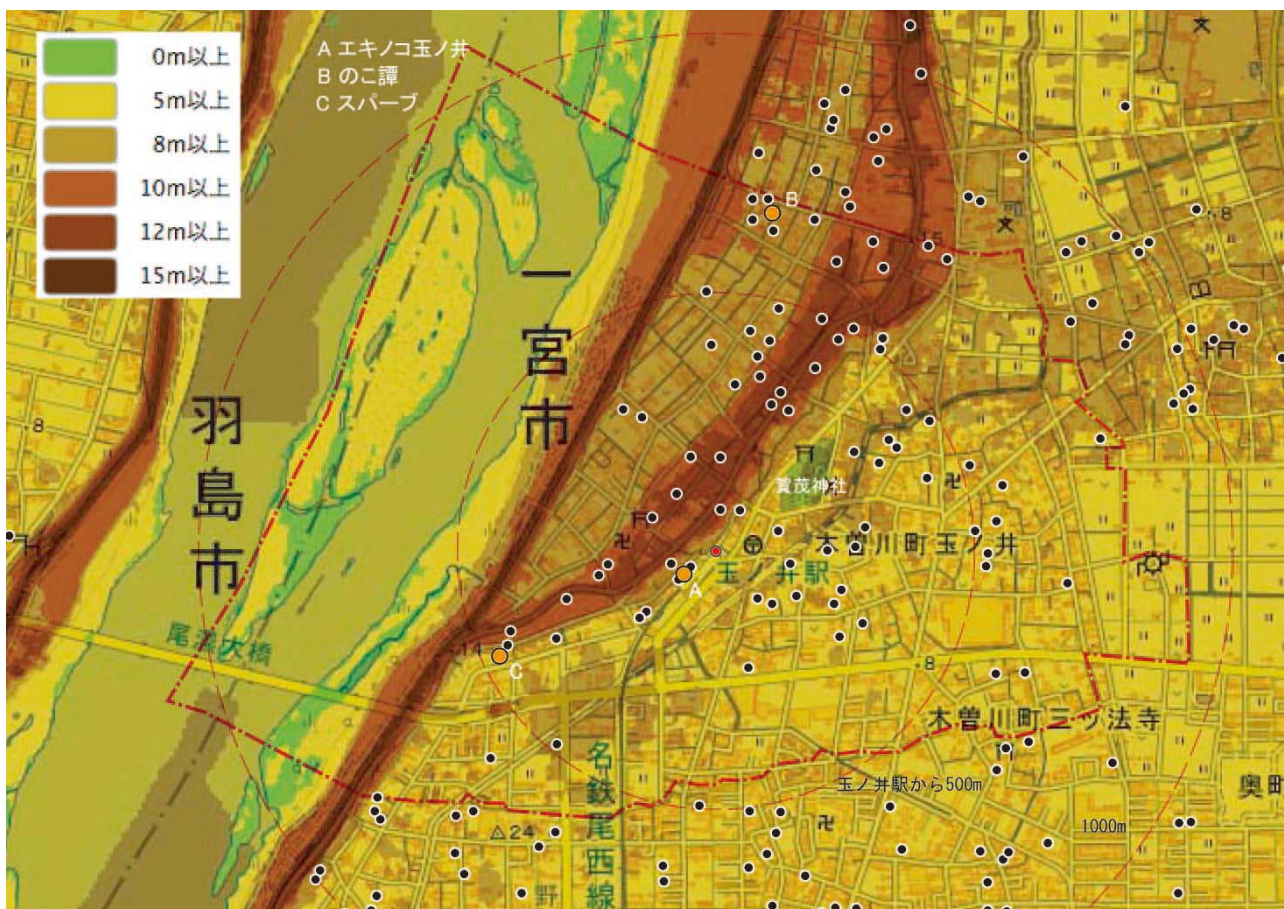
1. 玉ノ井ラビリンス

二両編成の真っ赤な車両が玉ノ井駅に滑り込む。市の中心部からわずか10分の距離であるが、岐阜県との県境、木曽川の東岸部にあり、終着駅であることも手伝って、辺境のまちの気配を醸し出す。ここから、ノコギリヤネの玉ノ井ラビリンスが始まる。

駅から北東方向に徒歩5分、玉ノ井という地名の由来となった霊泉・玉ノ井清水を持つ賀茂神社が立地する。1300年ほど前、光明皇后の目の病気を治癒させた逸話が残る。その南を鎌倉街道が通り、中世には、「諸人行きて彼水をくみ侍る云々」（尾張名所図絵）として賑わいを見せたという。鎌倉街道は、真清田神社から北上し、黒田の宿を經由、賀茂神社の南側を通り、西に抜けて木曽川を越えて美濃に渡るもので、鎌倉から京に至る当時の幹線道路であった。

玉ノ井駅のすぐ西側には、1593年豊臣秀吉の命によって築かれた御囲堤が南北に円弧状に走る。その西側、1938年の洪水を契機として木曽川に沿って堤防が築かれた。二重堤防と呼ばれる。堤防が平坦な地形に高低差を生み、また、未整備の細街路網が防災等の問題とは裏腹に路地的な面白さを演出する。ラビリンスと称した所以である。そこにノコギリヤネが加わる。

農家の庭先に建てられたノコギリヤネは、母屋と接するプライベートな性格が強い一方で、外部ともつながる空間である。ウチとソトをつなぐ、あるいはその融合。それは、私と公のインターフェイスでもある。ノコギリヤネもラビリンスだ。二年前の玉ノ井探索の折、尾濃大橋の足元にアウトドアショップの「スパーブ」を訪ねた。閉じられていたノコギリヤネがひとつ開いた。玉ノ井は面白くなると直感した。木東綺譚の始まりであった。



▲ 玉ノ井ラビリンス（玉ノ井地区に残るノコギリヤネはおよそ80棟）

2. エキノコが「開く」とき

三年前の台風で傷ついた玉ノ井駅に隣接するノコギリヤネ。それをきっかけに、所有者のK氏と「のこぎりニ」のオーナーであるH氏の二人を軸に対話が始まる。シンボリックなノコギリヤネだ。できれば残したいと多くの人がそう思う。でも、これは個人の持ち物だ。ノコギリヤネを開く模索が始まる。そして、ノコギリヤネに関わる人たちが増えていった。

玉ノ井駅は、1914年の尾西鉄道・新一宮～木曾川橋間開通時に開設された。鉄道は、御園堤の縁に沿うように敷かれた。そして、玉ノ井駅以北が1959年に廃止となり終着駅となった。現在、1日の平均乗降人員約1,400人の無人駅である。玉ノ井駅は、およそ700人が利用する小さな駅に過ぎないが、玉ノ井のエリアに、毎日それだけの不特定多数の人たちが行き交う場所はない。駅は公共性の高い場所である。そして、ホームの目の前に佇む「エキノコ玉ノ井」。玉ノ井の多くの人たちに共有されている「ノコギリヤネのある風景」ではないだろうか。

気持ちよく晴れた朝だった。K氏は、久しぶりに始発電車が発車するところを見た。静かなホームに目をやりながら、昨日の会合のH氏の言葉を思い出し、一人つぶやいていた。

まいったな。遊ばせておくくらいなら、有効活用したらどうかと儲け話をもちかけてくる奴はいっぱいいる。そうじゃないんだ。「ここで遊ばせて欲しい」と言ってきた。確かにここは面白いところさ。それはオレが一番知っている。「ノコギリ・スケルトン・トライアル」とか言っていたな。たくさんの人たちが関わることで、もっと面白い場になるかもしれない。オレも一緒に遊ばせてもらうとするか。



▲ 閉じたノコギリヤネの風景（この2年の間に消滅したものもある）

3. ノコギリ・スケルトン・トライアル・・・ノコギリヤネが遊んでいる

エキノコ玉ノ井には、二度、訪れていた。このノコギリヤネは、常に仮設／仮説的な装いを見せてくれた。一度目は、まだ足場が組まれていた。上に登らせてもらった。ノコギリヤネの上から町を見渡す楽しみを体感した。

二度目は、写真展「波を織る人たち」の準備中であつた。傷ついた東の壁面は取り除かれ、新しい方向から光が入る。スケルトンを抜ける風に、間仕切りのカーテンが揺れる。そして、目と鼻の先を時折、ゆっくりと電車が行きかう。展示会の静の空間に侵入する緩やかな動きと音。それをノコギリヤネが演出している。これは、ノコギリヤネを「開く」というトライアルである。プライベートな空間でありながら、「公園」に通じるものがある。

この場で、建築を志す三名の若者が共演した。K君の40分の1スケールの大模型を前に、自分の部屋がないというオーナーの突込みが入る。ノコギリヤネは「私と公」が織りなす空間の多様性を創造するだろう。それを、T君が挑むノコギリヤネのバリエーションの模索に期待したい。H君のノコギリヤネ研究の先には、独自のノコギリヤネ空間の創造を期待している。彼の設計思想の根底には「土間」がある。ノコギリヤネは上だけじゃない、下も面白い。彼らが、想いもよらない切り口で、ノコギリヤネを開いてくれる日が来ることを楽しみに待ちたい。

その夜、K氏はノコギリヤネに語りかけていた。ここを開いたことで、人だけでなく、新鮮な光や風が入ってきて、オマエが遊んでいる姿を見た。「遊ばせてくれ」というのは、オマエの願いだったのかもしれないな。ここは、ずっと働く場所だったが、こんなに自由な空間になった。



▲ 開かれた「エキノコ玉ノ井」

4. もう一つの木東綺譚

ここは、玉ノ井大縄場十ノ切。二重堤防の中に位置する。大縄場とは長い縄で測るほどの広い土地を意味する。古い地図には、見取所とあり、元々は地味の劣る土地であったと考えられる。ここで、一つのノコギリヤネが再生した。「のこ譚」と名づけられた。不動産業を営む一人の青年H氏がここに価値を見出し、ノコギリヤネに魅せられた建築士M氏がノコギリヤネに命を吹き込んだ。自らユーザーとして設計事務所を置き、周辺を巻き込んだ物語(譚)の展開が期待される。

のこ座の終了後、「のこ譚」を訪ねた。二人も「のこ座」に参加された。「ここ来ると、みんな時間を忘れるんですよ。空調など少し手を加えるだけで快適な環境を作れます」という。一宮のノコギリヤネの8割方が一・二連の小さなものである。法規制上も対応しやすい200㎡に満たない小規模のノコギリヤネのポテンシャルは非常に大きいという。彼ら流のエキノコ再生譚もあるようだ。ノコギリヤネの「開き方」は、いろいろあるはずだ。大きなムクの木の下、デッキチェアに身を沈める。居心地が良い。暫くすると、背後からムクの木が語りかけてきた。

お前は確か二年前にここに来ていたな。遠巻きに、俺と崩れ落ちそうなこのノコギリヤネを眺めていた。どうだ、変わっただろう。でも、これで終わりじゃない。始まりさ。ここで働く人たち、訪れる人たち、迷い込む者たち。そして、この周りに住む人たちや他のノコギリヤネと一緒に物語を紡いでいくのさ。それが、まちとなる。時間とともに、ここもカタチを変えて行くはずだ。オレの役目は、ここに根を張り、その移り変わりを見守ることさ。まあ、少しばかりちょっかいは出すけれど。



▲「のこ譚」(ワークサロンとして再生されたノコギリヤネ)

○エピローグ：起から玉ノ井へ、そして籠屋に戻る

翌日、一宮の真清田神社を訪れた。楼門の横、東西に連なる「はねあげ店」の一角にあるハンバーガーショップで昼食をとった。この並びは、真清田神社の結界のような場所である。デザートは、本町に進出した各務原発のアイスストア。各務原市には、村国真墨田神社がある。ここでは触れないが、面白くなる要素が満載である。暫しマスマダ・ラビリンスを愉しみ、のこぎり二に向かった。

始まりは、起の尾西歴史民俗資料館であった。のこぎり二の同居人A氏と立ち上げた「ノコギリアン・ガッカイ」の展示会に始まり、玉ノ井のエキノコを経て、最後は籠屋に戻った。ノコギリヤネつながりの三角形（ノコギリヤネ・トライアングル）が浮かび上がってきた。

玉ノ井というまちの未来に想いを馳せる。ノコギリ・スケルトン・トライアルのような試みがまちの活性化につながればと誰しも思うだろう。しかし、その「まちづくり」の主体は誰が担うのだ。一日たかだか700人が利用するにすぎない小さな駅である。都会の駅周りとは違って、ここに投資する事業者はいない。行政の将来計画も白紙である。さらに、玉ノ井の面白さでもある細街路の多くは「法定外道路」と呼ばれるものであり、沿道は建て替えさえもできない可能性がある。そして高齢化がさらに進み、空き家が増加する。この国の多くの地域に共通する姿である。

しかし、玉ノ井、いや一宮には他にはないものがある。それは、市内に残る2,000のノコギリヤネである。ノコギリヤネが開くことで、アクティビティを誘発する。それが「まちづくり」に発展するかどうかはわからない。ただ、ノコギリヤネと「対話」を重ねていくことで「私」の世界から生まれる真に自由な空間が、地域社会の閉塞状況を打ち破る可能性を秘めているのではないかと期待している。のこ譚は、ノコギリヤネ再生の一つの方向性を提示した。そのベクトルは、のこぎり二、エキノコ玉ノ井とは異なるものである。「開き方」はいろいろあるはずだ。ムクの木の花の精が教えてくれたように、のこ譚もカタチを変えていくであろう。

エキノコのオーナーK氏のFace Bookに、エキノコ内に吹き込む風に室内に架けられた布地が舞い踊るような動画が上げられていた。それは、開かれたノコギリヤネが無邪気に風と遊ぶ姿に見えた。「開くこと」と「遊ぶこと」は、親和性が高いのかもしれない。のこぎり二では、ブランコが西日と戯れていた。

なお、本文中で描かれたK氏の振る舞い、思考等は、全て創作である。木東綺譚としてご理解いただきたい。

2021.11.27（小雪・朔風払葉／しょうせつ・さくふう はをはらう）



▲ 「起・尾西歴史民俗資料館」に始まり、「玉ノ井」を経て「籠屋・のこぎり二」に戻る